

登場人物

信子

照子

夫

俊吉

一 一場

◆東京都内。信子・俊吉の紹介。大学時代の回想。 ◆ナレーター

信子は 女子大学にいた時から、才媛の名声を担っていた。
彼女が 早晚作家として 文壇に打って出る事は、殆ど誰も
疑わなかった。中には 彼女が在学中、既に 三百何枚かの
自叙伝体小説を書き上げたなどと吹聴して歩くものもあった。
が、学校を卒業して見ると、まだ女学校も出ていない 妹の照子と
彼女とを抱えて、後家を立て通して来た母の手前も、そうは
我儘を云われない、複雑な事情も ないではなかった。そこで彼女は
創作を始める前に、まず世間の習慣通り、縁談からきめてかかるべく
余儀なくされた。

彼女には 俊吉と云う従兄があった。彼は 当時まだ大学の文科に
籍を置いていたが、やはり 将来は 作家仲間に身を投ずる意志が
あるらしかった。信子はこの従兄の大学生と、昔から親しく
往来していた。それが 互に文学と云う共通の話題が出来てからは、
愈 親しみが増したようであった。唯、彼は 信子と違って、
当世流行のトルストイズムなどには 一向敬意を表さなかった。
そうして始終 フランス仕込みの皮肉や警句ばかり並べていた。
こう云う 俊吉の 冷笑的な態度は、時々 万事真面目な信子を
怒らせてしまう事があった。が、彼女は怒りながらも 俊吉の皮肉や
警句の中に、何か軽蔑出来ないものを感じない訳には行かなかった。

だから 彼女は 在学中も、彼と一しよに 展覧会や音楽会へ
行く事が稀ではなかった。尤 大抵そんな時には、妹の照子も
同伴であった。彼等三人は 行きも返りも、気兼ねなく笑ったり
話したりした。が、妹の照子だけは、時々 話の圈外へ置きざりに
される事もあった。それでも照子は 子供らしく、飾窓の中のパラソルや
絹のショールを覗き歩いて、格別 閑却された事を不平に思っても
いないらしかった。信子はしかし それに気がつく、必 話頭を転換して、
すぐに又元の通り 妹にも口をきかせようとした。その癖 まず照子を
忘れるものは、何時も 信子自身であった。俊吉は すべてに
無頓着なのか、不変気の利いた冗談ばかり投げつけながら、
目まぐるしい往来の人通りの中を、大股にゆっくり歩いて行った。……

一 二場

◆大学卒業後。信子の結婚と周囲の反応。

◆ナレーター

信子と従兄との間がらは、勿論誰の眼に見ても、来るべき彼等の結婚を予想させるのに十分であつた。同窓たちは彼女の未来をてんでに羨んだり妬んだりした。殊に俊吉を知らないものは、（滑稽と云うより外はないが、）一層これが甚しかった。信子も亦一方では彼等の推測を打ち消しながら、他方ではその確な事をそれとなく故意に仄かせたりした。従つて同窓たちの頭の中には、彼等が学校を出るまでの間に、何時か彼女と俊吉との姿が、恰も新婦新郎の写真の如く、一しよにはつきり焼きつけられていた。ところが学校を卒業すると、信子は彼等の予期に反して、大阪のあるしょうじがいしゃ ちかづろきんむ 或商事会社へ近頃勤務する事になった、高商出身の青年と、突然結婚してしまつた。そうして式後二三日してから、新夫と一しよに勤め先きの大阪へ向けて立つてしまつた。その時中央停車場へ見送りに行ったものの話によると、信子は何時もと変りなく、晴れ晴れした微笑を浮かべながら、ともすれば涙を落し勝ちな妹の照子をいろいろと慰めていたと云う事であつた。

同窓たちは皆不思議がった。その不思議がる心の中には、妙に嬉しい感情と、前とは全然違った意味で妬ましい感情とが交つていた。あるいは彼女を信頼して、すべてを母親の意志に帰した。又或ものは彼女を疑つて、心がわりがしたとも云いふらした。

が、それらの解釈が結局想像に過ぎない事は、彼等自身さえ
知らない訳ではなかった。彼女はなぜ俊吉と結婚しなかったか？
彼等は、その後暫くの間、よるとさわると、重大らしく、必
この疑問を話題にした。そうして彼は二月ばかり経つと――
全く信子を忘れてしまった。勿論、彼女が書く筈だった
長篇小説の噂なども。

一 三場

◆大阪郊外。信子の新居。照子からの手紙を読む。 ◆ナレーター・照子

信子はその間に、大阪の郊外へ、幸福なるべき新家庭をつくった。彼等の家は、その界限でも最も閑静な松林にあった。松脂の匂と日の光と、——それが何時でも、夫の留守は、二階建の新しい借家の中に、活き活きした沈黙を領していた。信子はそう云う寂しい午後、時々理由もなく気が沈むと、きつと針箱の引出しを開けては、その底に畳んでしまつてある桃色の書簡箋をひろげて見た、書簡箋の上にはこんな事が、細々ペンで書いてあつた。

照子 「——もう今日かぎり御姉様と御一しよにいる事が出来ないと思ふと、これを書いている間でさえ、止め度なく涙が溢れて来ます。御姉様。どうか、どうか私を御赦し下さい。照子は勿体ない御姉様の犠牲の前に、何と申し上げて好いかもわからずに居ります。

照子 「御姉様は私の為に、今度の御縁談を御きめになりました。そうではないと仰有つても、私にはよくわかつて居ります。何時ぞや御一しよに帝劇を見物した晩、御姉様は私に俊さんは好きかと御尋きになりました。それから又好きならば、御姉様がきつと骨を折るから、俊さんの所へ行けども仰有いました。あの時もう御姉様は、私が俊さんに差上げる筈の手紙を読んでいらしたのでしよう。あの手紙がなくなった時、ほんとうに私は御姉様を御恨めしく思いました。

(御免遊ばせ。この事だけでも 私 は どの位申し訳がないかわかりません。)ですからその晩も 私 には、御姉様の親切な御言葉も、皮肉のような気さえ致しました。私 が 怒って 御返事らしい御返事も碌に致さなかった事は、もちろん御忘れになりも なさりますまい。けれどもあれから二三日経って、御姉様の御縁談が急にきまってしまった時、私 はそれこそ 死んででも、御託びをしようかと思いました。御姉様も俊さんが御好きなので、ございますもの。(御隠しになってはいや。私 はよく存じて居りましたよ。)私 の事さえ御かまいに ならなければ きっと御自分が俊さんの所へいらしったのに 違いございません。それでも御姉様は 私 に、俊さんなどは 思っていないと、何度も繰返して仰有いました。そうして とうとう 心にもない御結婚をなすって御しまになりました。私の大事な御姉様。私 が今日 鶏を抱いて来て、大阪へいらっしゃる御姉様に、御挨拶をなさいと申した事をまだ覚えていらしって？ 私 は 飼っている 鶏にも、私 と一しよに御姉様へ御託びを申して 貰いたかったの。そうしたら、何にも御存知ない御母様まで 御泣きになりましたのね。

照子 「御姉様。もう明日は大阪へいらしって御しまいなさるでしょう。けれどもどうか 何時までも、御姉様の照子を見捨てずに頂戴、照子は 毎朝 鶏に餌をやりながら、御姉様の事を思い出して、誰にも知れず泣いています。……」

信子 は この少女らしい手紙を読む毎に、必 涙が滲んで来た。

殊に 中央停車場から汽車に乗ろうとする間際、そつとこの手紙を
彼女に渡した照子の姿を思い出すと、何とも云われずにいじらしかった。
が、彼女の結婚は 果して妹の想像通り、全然犠牲的なそれで
あろうか。そう 疑を挟む事は、涙の後の彼女の心へ、重苦しい
気持ちに 拡張勝ちであつた。信子は この重苦しさを避ける為に、
大抵はじつと 快い感傷の中に浸っていた。そのうちに 外の
松林へ一面に 当つた日の光が、だんだん黄ばんだ暮方の色に
変つて行くのを眺めながら。

二 一場

◆信子と夫の新婚生活の様子。

◆ナレーター・夫

結婚後 彼は三月ばかりは、あらゆる新婚の夫婦の如く、彼等も亦幸福な日を送った。

夫は 何処か女性的な、口数を利かない人物であった。それが毎日会社から帰って来ると、必 晩飯後の何時間かは、信子と一しよに過す事になっていた。信子は 編物の針を動かしながら、近頃世間に騒がれている小説や戯曲の話などもした。その話の中には時によると、基督教の句のする女子大学趣味の人生観が織りこまれている事もあった。夫は 晩酌の頬を赤らめた儘、読みかけた夕刊を膝へのせて、珍しそうに耳を傾けていた。が、彼自身の意見らしいものは、一言も加えた事がなかった。

彼等は又 殆 日曜毎に、大阪やその近郊の遊覧地へ 気散じな一日を暮しに行った。信子は 汽車電車へ乗る度に、何処でも飲食する事を憚らない関西人が 皆卑しく見えた。それだけおとなしい夫の態度が、格段に上品なのを嬉しく感じた。実際身綺麗な夫の姿は、そう云う人中に交っていると、帽子からも、背広からも、或は又 赤皮の編上げからも、化粧石鹸の匂に似た、一種清新な雰囲気を放散させているようであった。殊に夏の休暇中、舞子まで足を延した時には、同じ茶屋に来合せた夫の同僚たちに比べて見て、一層誇りがましいような心もちがせずにはいられなかった。

が、夫はその下卑た同僚たちに、存外親しみを持っているらしかった。

その内に信子は長い間、捨ててあった創作を思い出した。

そこで夫の留守の内だけ、一二時間ずつ机に向う事にした。

夫はその話を聞くと、

夫 「愈女流作家になるかね。」

と云って、やさしい口もとに薄笑いを見せた。しかし机には

向うにしても、思いの外ペンは進まなかった。彼女はぼんやり

頬杖について、炎天の松林の蟬の声に、我知れず耳を傾けている

彼女自身を見出し勝ちであった。

二二場

◆初秋。夫の言動の変化。

◆ナレーター・信子・夫

ところが 残暑が 初秋へ 振り変ろうとする 時分、 夫は 或日 会社の出がけに、 汗じみた襟を取変えようとした。が、 生憎 襟は 一本残らず 洗濯屋の手に渡っていた。 夫は 日頃身綺麗なだけに、 不快らしく 顔を曇らせた。そうして ズボン吊を掛けながら、

夫 「小説ばかり書いていちゃ困る。」

と 何時になく厭味を云った。 信子は 黙って眼を伏せて、 上衣の埃を 払っていた。

それから二三日過ぎた或夜、 夫は 夕刊に出ていた 食糧問題から、 月々の経費をもう少し軽減出来ないものかと云い出した。

夫 「お前だって 何時までも女学生じゃあるまいし。」

——そんな事も口へ出した。 信子は 氣のない返事をしながら、 夫の襟飾の紹刺しをしていた。すると 夫は 意外な位執拗に、

夫 「その襟飾にしてもき、 買う方が 反って安くつくじゃないか。」

と、やはりねちねちした調子で云った。 彼女は猶更口が利けなくなった。 夫も しまいには白けた顔をして、 つまらなそうに 商売向きの 雑誌か何かばかり読んでいた。が、 寝室の電燈を消してから、 信子は 夫に背を向けた儘、

信子 「もう小説なんぞ書きません。」

と、 囁くような声で云った。 夫はそれでも黙っていた。

暫しばくして彼女かのじよは、同じ言葉ことばを 前まえよりもかすかに繰返くりかえした。
それから間まもなく 泣なく声こえが洩もれた。夫おつとは 二言三言ふたことみこと 彼女かのじよを叱しかった。
その後あとでも 彼女かのじよの啜泣すすりなきは、まだ絶たえ絶だえに聞きこえていた。が、信子のぶこは
何時いつの間まにか、しっかりと夫おつとにすがっていた。……

二 三場

◆夫の不機嫌と仲直りの繰り返し。

◆ナレーター・夫

翌日 彼等は又元の通り、仲の好い夫婦に返っていた。

と思うと今度は十二時過ぎても、まだ夫が会社から帰って来ない

晩があった。しかも 漸く帰って来ると、雨外套も一人では脱げない程、

酒臭い匂を呼吸していた。信子は眉をひそめながら、甲斐甲斐しく

夫に着換えさせた。夫はそれにも関らず、まわらない舌で

皮肉さえ云った。

夫 「今夜は僕が帰らなかったから、余っ程小説が捗取ったろう。」

——そう云う言葉が、何度となく 女のような口から出た。彼女はその後

床にはいると、思わず 涙がほろほろ落ちた。

信子 こんな処を照子が見たら、どんなに一しよに泣いてくれるで

あろう。照子。照子。私が便りに思うのは、たったお前一人ぎりだ。

——信子は度々 心の中でこう 妹に呼びかけながら、

夫の酒臭い寝息に苦しまされて、殆夜中 まんじりともせずに、

寝返りばかり打っていた。

が、それも亦翌日になると、自然と仲直りが出来上っていた。

二 四場

◆秋。信子が雑誌に俊吉の投稿を発見。夫に媚びることを覚える。

◆ナレーター・夫

そんな事が何度か繰返される内に、だんだん秋が深くなって来た。

信子は 何時か 机に向って、ペンを執る事が稀になった。

その時にはもう 夫の方も、前程彼女の文学談を珍しがらないように

なっていた。彼等は夜毎に長火鉢を隔てて、瑣末な 家庭の

経済の話に 時間を殺す事を覚え出した。その上 又 こう云う話題は、

少くとも 晩酌後の夫にとって、最も興味があるらしかった。

それでも信子は気の毒そうに、時々夫の顔色を窺って見る事があった。

が、彼は何も知らず、近頃延した髭を噛みながら、何時もより余程

快活に、

夫 「これで子供でも出来て見ると――」

なぞと、考え考え話していた。

すると その頃から月々の雑誌に、従兄の名前が見えるようになった。

信子は結婚後 忘れたように、俊吉との文通を絶っていた。唯、

彼の動静は、――大学の文科を卒業したとか、同人雑誌を始めたとか

云う事は、妹から手紙で知るだけであった。又 それ以上彼の事を

知りたいと云う気も起きなかった。が、彼の小説が雑誌に載っているのを

見ると、懐しきは昔と同じであった。彼女はその頁をはぐりながら

何度も独り微笑を洩らした。俊吉は やはり小説の中でも、

冷笑と諧謔との二つの武器を 宮本武蔵のように使っていた。

彼女にはしかし 気のせいか、その軽快な皮肉の後に、何か今までの
従兄にはない、寂しそうな捨鉢の調子が潜んでいるように思われた。
と同時に そう思う事が、後めたいような気もしないではなかった。

信子はそれ以来 夫に対して、一層優しく振舞うようになった。

夫は 夜寒の長火鉢の向うに、何時も晴れ晴れと微笑している彼女の
顔を見出した。その顔は以前より若々しく、化粧をしているのが
常であった。彼女は 針仕事の店を拡げながら、彼等が東京で
式を挙げた当時の記憶なども話したりした。夫には その記憶の
細かいのが、意外でもあり、嬉しそうでもあった。

夫 「お前はよくそんな事まで覚えているね。」

—— 夫にこう調戲されると、信子は 必 無言の儘、眼にだけ媚のある
返事を見せた。が、何故それ程忘れずにいるか、彼女自身も 心の内では、
不思議に思う事が度々あった。

二 五場

◆照子と俊吉の結婚の知らせを受ける。

◆ナレーター・信子・夫

それから程なく、母の手紙が、信子に妹の結納が済んだと云う事を報じて来た。その手紙の中には又、俊吉が照子を迎える為に、山の手の或郊外へ新居を設けた事もつけ加えてあった。彼女は早速母と妹とへ、長い祝いの手紙を書いた。

信子「何分当方は無人故、式には不本意ながら参りかね候えども……」

そんな文句を書いている内に、（彼女には何故かわからなかったが、）筆の滲る事も再三あった。すると彼女は眼を挙げて、必外の松林を眺めた。松は初冬の空の下に、簇々と蒼黒く茂っていた。

その晩信子と夫とは、照子の結婚を話題にした。夫は何時もの薄笑いを浮かべながら、彼女が妹の口真似をするのを、面白そうに聞いていた。が、彼女には何となく、彼女自身に照子の事を話しているような心もちがした。

夫「どれ、寝るかな。」

——二三時間の後、夫は柔かな髭を撫でながら、大儀そうに長火鉢の前を離れた。信子はまだ妹へ祝ってやる品を決し兼ねて、火箸で灰文字を書いていたが、この時急に顔を挙げて、

信子「でも妙なもののね、私にも弟が一人出来るのだと思うと。」
と云った。

夫「当たり前じゃないか、妹もいるんだから。」

——彼女は夫にこう云われても、考深い眼つきをした儘、何とも返事をしなかった。

照子と俊吉とは、師走の中旬に式を挙げた。当日は午少し前から、ちらちら白い物が落ち始めた。信子は独り午の食事をすませた後、何時までもその時の魚の匂が、口について離れなかった。

信子 「東京も雪が降っているかしら。」

——こんな事を考えながら、信子はじっとうす暗い茶の間の長火鉢にもたれていた。雪が愈烈しくなった。が、口中の生臭さは、やはり執念く消えなかった。……

三 一場

◆翌年の秋。東京郊外。信子、照子と俊吉の新居を訪問。

◆ナレーター・信子・俊吉

信子は その翌年の秋、社命を帯びた夫と一しよに、久しぶりで東京の土を踏んだ。が、短い期限内に、果すべき用向きの多かった夫は、唯彼女の母親の所へ、来匆匆々顔を出した時の外は、殆ど一日も彼女をつれて、外出する機会を見出さなかった。彼女はそこで妹夫婦の郊外の新居を尋ねる時も、新開地じみた電車の終点から、たった一人俤に揺られて行った。

彼等の家は、町並が葱畑に移る近くにあった。しかし隣近所には、いずれも借家らしい新築が、せせこましく軒を並べていた。のき打ちの門、要もちの垣、それから竿に干した洗濯物、――すべてがどの家も変りはなかった。この平凡な住居の容子は、多少信子を失望させた。

が、彼女が案内を求めた時、声に応じて出て来たのは、意外にも従兄の方であった。俊吉は 以前と同じように、この珍客の顔を見ると、

俊吉 「やあ。」

と快活な声を挙げた。彼女は 彼が何時の間にか、いが栗頭でなくなったのを見た。

信子 「暫らく。」

俊吉 「さあ、御上り。生憎僕一人だが。」

信子 「照子は？ 留守？」

俊吉 「使つかいに行いった。女中じょちゆうも。」

——信子のぶこは 妙みょうに恥はずかしさを感かんじながら、派手はでな裏うらのついた上コート衣えを
そつと玄関げんかんの隅すみに脱ぬいだ。

俊吉しゅんきちは 彼女かのじょを書斎しやさい兼客間けんきやくまの八畳はちじようへ坐すわらせた。座敷ざしきの中なかには
何処どこを見みても、本ほんばかり乱雑らんざつに積つくんであつた。殊ことに 午後ごごの
日ひの当あたつた障子しょうじ際ぎわの、小ちいさな紫檀したんの机つくえのまわりには、新聞しんぶん雑誌ざっしや
原稿用紙げんこうようしが、手てのつけようもない程散ほどちらかつていた。その中なかに
若わかい細君さいくんの存在そんざいを語かたっているものは、唯ただ 床とこの間まの壁かべに立たてかけた、
新あたらしい一面いちめんの琴ことだけであつた。信子のぶこは こう云いう周囲しゅういから、暫しばらく
物珍ものめずらしい眼めを離はなさなかつた。

俊吉 「来くることは手紙てがみで知しっていたけれど、今日きよう来きようとは
思おもわなかつた。」

——俊吉しゅんきちは 巻煙草まきたばこへ火ひをつけると、さすがに懷なつかしそうな眼めつきをした。

俊吉 「どうです、大阪おおさかの御生活ごせいかつは？」

信子 「俊さんこそ如何いかに？ 幸福こうふく？」

——信子のぶこも亦また 二言三言話ふたことみことはなす内に、やはり 昔むかしのような懷なつかしさが、
よみ返がえつて来くるのを意識いしきした。文通ぶんつうさえ碌ろくにしなかつた、彼かれ是これ二年越にねんごしの
気きまずい記憶きおくは、思おもつたより彼女かのじょを煩わづらわさなかつた。

彼等かれらは 一ひとつ火鉢ひばちに手てをかぎしながら、いろいろな事ことを話はなし合あつた。
俊吉しゅんきちの小説しょうせつだの、共通きようつうな知人ちじんの噂うわさだの、東京とうきようと大阪おおさかとの
比較ひかくだの、話題わだいは いくら話はなしても、尽つきない位くらい沢山たくさんあつた。
が、二人ふたりとも 云いい合あわせたように、全然ぜんぜん暮くらし向むきの問題もんだいには触ふれなかつた。

それが 信子には 一層従兄と、話していると云う感じを強くさせた。

時々しかし 沈黙が、二人の間に來る事もあった。その度に彼女は微笑した儘、眼を火鉢の灰に落した。其処には 待つとは云えない程、かすかに何かを待つ心もちがあった。すると 故意か偶然か、俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破った。彼女は 次第に従兄の顔を窺わずにはいられなくなった。が、彼は 平然と巻煙草の煙を呼吸しながら、格別不自然な表情を装っている気色も見えなかった。

三 二場

◆照子が帰宅する。

◆ナレーター・信子・照子・俊吉

その内に 照子が帰って来た。彼女は 姉の顔を見ると、
手をとり合わないばかりに嬉しがった。信子も 唇は笑いながら、
眼には何時かもう涙があつた。二人は 暫くは俊吉も忘れて、
去年以来の生活を 互に尋ねたり尋ねられたりしていた。
殊に照子は 活き活きと、血の色を頬に透かせながら、今でも
飼っている 鶏の事まで、話して聞かせる事を忘れなかった。
俊吉は巻煙草を啣えた儘、満足そうに二人を眺めて、不変
にやにや笑っていた。

其処へ 女中も帰って来た。俊吉は その女中の手から、何枚かの
端書を受取ると、早速側の机へ向つて、せっせとペンを動かし始めた。
照子は 女中も留守だった事が、意外らしい気色を見せた。

照子 「じゃ 御姉様がいらした時は、誰も家にいなかったの。」

信子 「ええ、俊さんだけ。」

——信子はこう答える事が、平氣を強いるような心もちがした。
すると 俊吉が向うを向いたなり、

俊吉 「旦那様に感謝しろ。その茶も僕が入れたんだ。」

と云った。照子は姉と眼を見合せて、悪戯そうにくすりと笑った。
が、夫にはわざとらしく、何とも返事をしなかった。

三 三場

◆同日夜。三人で夕食を共にする
◆ナレーター・信子・照子・俊吉

間もなく 信子は、妹夫婦と一しよに、晩飯の食卓を囲むことになった。照子の説明する所によると、膳に上った玉子は皆、家の鶏が産んだものであった。俊吉は 信子に葡萄酒をすすめながら、

俊吉 「人間の生活は掠奪で持っているんだね。小はこの玉子から」

——などと社会主義じみた理窟を並べたりした。その癖 此処にいる三人の中で、一番玉子に愛着のあるのは 俊吉自身に違いなかった。照子は それが可笑しいと云って、子供のようないやらしい声を立てた。信子は こう云う食卓の空気にも、遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思い出さずにいらなかった。

話は 食後の果物を荒した後も尽きなかった。微酔を帯びた俊吉は、夜長の電燈の下にあぐらをかいて、盛に 彼一流の詭弁を弄した。その談論風発が、もう一度信子を若返らせた。彼女は熱のある眼つきをして、

信子 「私も 小説を書き出そうかしら。」

と云った。すると従兄は 返事をする代りに、グールモンの警句を抛りつけた。それは

俊吉 「ミュージズたちは女だから、彼等を自由に虜にするものは、男だけだ。」

と云う言葉であつた。信子と照子とは 同盟して、グールモンの権威を認めなかつた。

照子 「じゃ 女でなけりや、音楽家になれなくって？ アポロは男じゃありませんか。」

—— 照子は 真面目にこんな事まで云つた。

三四場

◆同日夜更け。信子と俊吉が二人で庭を散歩する。

◆ナレーター・信子・俊吉

その暇に 夜が更けた。信子は とうとう泊る事になった。

寝る前に 俊吉は、縁側の雨戸を一枚開けて、寝間着の儘狭い庭へ下りた。それから 誰を呼ぶともなく

俊吉 「ちよいと出て御覧。好い月だから。」

と声をかけた。信子は 独り 彼の後から、沓脱の庭下駄へ足を下した。足袋を脱いだ彼女の足には、冷たい露の感じがあつた。

月は 庭の隅にある、痩せがれた檜の梢にあつた。従兄はその檜の下に立って、うす明い夜空を眺めていた。

信子 「大へん草が生えているのね。」

信子は 荒れた庭を 気味悪そうに、怯ず怯ず彼のいる方へ歩み寄つた。が、彼はやはり空を見ながら、

俊吉 「十三夜かな。」

と呟いただけであつた。

暫く沈黙が続いた後、俊吉は静に眼を返して、

俊吉 「鶏小屋へ行つて見ようか。」

と云つた。信子は 黙って頷いた。鶏小屋は 丁度 檜とは反対の庭の隅にあつた。二人は肩を並べながら、ゆっくり其処まで歩いて行つた。

しかし 席囲いの内には、唯 鶏の匂のする、朧げな光と影ばかりがあつた。俊吉は その小屋を覗いて見て、殆ど独り言かと思うように、

俊吉 「寝ている。」

と 彼女に囁いた。

信子 「玉子を人に取られた鶏が。」

——信子は 草の中に佇んだ儘、そう考えずにはいられなかった。……

二人が庭から返って来ると、照子は 夫の机の前に、ぼんやり電燈を眺めていた。青い横ばいがたった一つ、笠に這っている電燈を。

四 一場

◆翌日。俊吉が外出。信子と照子で留守番する。

◆ナレーター・信子・照子・俊吉

翌朝 俊吉は 一張羅の背広を着て、食後匆匆 玄関へ行った。

何でも 亡友の一周忌の墓参をするのだとか云う事であった。

俊吉 「好いかい。待っているんだぜ。午頃までにや きっと帰って来るから。」

彼は 外套をひっかけながら、こう信子に念を押した。が、彼女は華奢な手に 彼の中折を持った儘、黙って微笑したばかりであった。

照子は 夫を送り出すと、姉を長火鉢の向うに招じて、まめまめしく

茶をすすめなどした。隣の奥さんの話、訪問記者の話、それから

俊吉と見に行った或外国の歌劇団の話、——その外愉快なるべき話題が、

彼女には まだいろいろあるらしかった。が、信子の心は沈んでいた。

彼女は ふと気がつく、何時も好い加減な返事ばかりしている

彼女自身が其処にあった。それがとうとうしまいには、照子の眼にさえ

止るようになった。妹は 心配そうに彼女の顔を覗きこんで、

照子 「どうして？」

と尋ねてくれたりした。しかし 信子にも どうしたのだから、はつきりした事はわからなかった。

四 二場

◆同日の午前中。信子と照子の関係が崩れはじめる。

◆ナレーター・信子・照子

柱時計が十時を打った時、信子は 懶そうな眼を挙げて、

信子 「俊さんは 中々帰りそうもないわね。」

と云った。照子も 姉の言葉につれて、ちよいと時計を仰いだが、これは存外冷淡に、

照子 「まだ——」

とだけしか答えなかった。信子にはその言葉の中に、夫の愛に飽き足りている新妻の心があるような気がした。そう思うと 愈彼女の気もちは、憂鬱に傾かずにはいられなかった。

信子 「照さんは幸福ね。」

——信子は 頤を半襟に埋めながら、冗談のようにこう云った。が、自然と其処へ忍びこんだ、真面目な羨望の調子だけは、どうする事も出来なかった。照子はしかし 無邪気らしく、やはり活き活きと微笑しながら、

照子 「覚えていらっしやい。」

と睨む真似をした。それからすぐに又

照子 「御姉様だって幸福の癖に。」

と、甘えるようにつけ加えた。その言葉がぴしりと信子を打った。

彼女は 心もち 瞼を上げて、

信子 「そう思ってた？」

と問い返した。問い返して、すぐに後悔した。照子は一瞬間
妙な顔をして、姉と眼を見合せた。その顔にも亦
動いていた。信子は強いて微笑した。――

信子 「そう思われるだけでも幸福ね。」

二人の間には沈黙が来た。彼等は柱時計の時を刻む下に、
長火鉢の鉄瓶がたぎる音を聞くともなく聞き澄ませていた。

照子 「でも御兄様は御優しくはななくって？」

――やがて照子は小さな声で、恐る恐るこう尋ねた。その声の中には
明かに、気の毒そうな響が籠っていた、が、この場合信子の心は、
何よりも憐憫を反撥した。彼女は新聞を膝の上へのせて、
それに眼を落したなり、わざと何とも答えなかった。

新聞には大阪と同じように、米価問題が掲げてあった。

その内に静な茶の間の中には、かすかに人の泣くけはいが
聞え出した。信子は新聞から眼を離して、袂を顔に当てた妹を
長火鉢の向うに見出した。

信子 「泣かなくなっちゃって好いのよ。」

――照子は姉にそう慰められても、容易に泣き止もうとはしなかった。
信子は残酷な喜びを感じながら、暫くは妹の震える肩へ
無言の視線を注いでいた。それから女中の耳を憚るように、
照子の方へ顔をやりながら、

信子 「悪るかったら、私があやまるわ。私は照さんさえ幸福なら、
何より難有いと思っっているの。ほんとうよ。俊さんが照さんを

愛あいしていてくれれば——」

と、低ひくい声こえで云いい続つづけた。云いい続つづける内うちに、彼女かのじよの声こえも、彼女かのじよ自身の言葉ことばに動うごかされて、だんだん感傷かんしょう的てきになり始はじめた。すると突然とつぜん 照子てるこは袖そでを落おして、涙なみだに濡ぬれている顔かおを挙あげた。彼女かのじよの眼めの中なかには、意外いがいな事ことに、悲かなしみも怒いかりも見みえなかつた。が、唯ただ、抑おさえ切きれない嫉妬しつとの情じょうが、燃もえるように瞳ひとみを火照ほらせていた。

照子 「じゃ御姉様は——御姉様は 何故なぜ 昨夜さくやも——」

照子てるこは 皆みなまで云いわない内うちに、又また 顔かおを袖そでに埋うめて、発作ほっさてき的に 烈はげしく泣なき始はじめた。……

四 三場

◆同日春頃。信子、東京を発とつとする。

◆ナレーター・信子

二三時間の後、信子は 電車の終点に急ぐべく、幌俵の上に揺られていた。彼女の眼にはいる外の世界は、前部の幌を切りぬいた、四角なセルロイドの窓だけであった。其処には 場末らしい家々と色づいた雑木の梢とが、徐に しかも絶え間なく、後へ後へと流れて行った。もし その中に 一つでも動かないものがあれば、それは薄雲を漂わせた、冷やかな秋の空だけであった。

彼女の心は 静かであった。が、その静かさを支配するものは、寂しい諦めに外ならなかった。照子の発作が終った後、和解は 新しい涙と共に、容易く 二人を 元の通り 仲の好い姉妹に返していた。しかし 事實は事實として、今でも信子の心を離れなかった。彼女は 従兄の帰りも待たず この俵上に身を託した時、既に妹とは永久に他人になったような心もちが、意地悪く 彼女の胸の中に氷を張らせていたのであった。――

信子は ふと眼を挙げた。その時 セルロイドの窓の中には、ごみごみした町を歩いて来る、杖を抱えた従兄の姿が見えた。彼女の心は動揺した。俵を止めようか。それともこの儘行き違おうか。彼女は動悸を抑えながら、暫くは唯 幌の下に、空しい逡巡を重ねていた。が、俊吉と彼女との距離は、見る見る内に近くなってきた。彼は薄日の光を浴びて、水溜りの多い往来に ゆっくりと靴を運んでいた。

信子 「俊さん。」

——そう云う声が 一瞬間、信子の唇から洩れようとした。
実際 俊吉はその時もう、彼女の俤のすぐ側に、見慣れた姿を
現していた。が、彼女は又ためらった。その暇に 何も知らない彼は、
とうとうこの幌俤とすれ違った。薄濁った空、疎らな屋並、高い木々の
黄ばんだ梢、——後には 不変人通りの少い 場末の町が
あるばかりであった。

信子 「秋——」

信子は うすら寒い幌の下に、全身で寂しさを感しながら、
しみじみ こう思わずにいられなかった。

〈完〉

附録

語彙

1-1 場

女子大学^{じょしだいがく}：明治時代、女子にも教育が必要であるという考えが西洋から流入しました。女性の教育の必要に目を向けたキリスト教の宣教師たちの支援によって、多くの私立女子大学が設立されました。教育内容は、英文学をはじめ、教養、良妻賢母教育、医学など多岐に渡りました。

才媛^{さいえん}：教養が高い女性。また、才能のある女性のことです。

文壇^{ぶんだん}：小説や随筆などを書いている作家や評論家のコミュニティのことです。文学界ともいいます。

自叙体小説^{じじょたいしょうせつ}：「私は〇〇した」のように、登場人物が自ら話す形式で書かれた小説のことです。

女学校^{じょがっこう}：明治時代から第二次世界大戦後の学制改革まで存在した、

旧制の女子教育機関です。時代によって種類や制度が多少変遷します。初等教育を終えた10代を中心とする女性が、中等教育・高等教育を受けました。現代でも、高校や大学の卒業式で振り袖と袴^{はかま}を身に付ける女子生徒・学生が多いですね。これは、大正時代の女学生のトレードマークである、大きなリボンと葡萄茶^{えびちや}の袴姿^{はかまがた}から来ています。

後家^{ごけ}：夫と死別した独身女性のことです。「後家を立て通す」とは、再婚せずに後家のままでいつづけることです。

縁談^{えんだん}：大正時代の結婚は、自由恋愛はまだ少なく、親の意向で決められることがほとんどでした。大正9年に行われた調査によると、平均初婚年齢は男性で25.0歳、女性で21.2歳。大学を卒業した信子は、21～23歳と推測されるので、適齢期だったといえるでしょう。

文科^{ぶんか}：大学で人文科学や社会科学を専攻する学科や学部です。文学科のみを指す場合もあります。東京大学などの総合大学の一部に、学科名として残っています。

当世^{とうせい}：現代やいまどき、という意味です。いまふうの文化や考え方を、「当世風」といったりします。

トルストイズム：「トルストイ主義」ともいいます。ロシアの小説家・思想家であるトルストイが始めた運動で、人類愛と勤労、自己犠牲を中心とする生活をおくることによって、より良い世界を作ろうとする運動です。日本では、明治時代から大正時代にかけて、武者小路実篤^{むしゃのこうじさねあつ}などをはじめとする文学者や社会主義者を夢中にさせ、庶民にも大きな影響を与えました。特に、日露戦争の際には、芸術家たちの反戦運動のモチベーションとなりました。

フランス仕込みの皮肉や警句^{しこ ひにく けいく}：警句とは、「急がば回れ」のように、短い表現で、物事の真理を言い当てた言葉のことです。箴言^{しんげん}ともいいます。明治時代以降、日本でもフランス文学が多く読まれるようになりました。なかでも、『ラ・ロシュフコー箴言集』は、芥川龍之介の愛読書でした。ラ・ロシュフコーは、「偽善とは、悪徳が美德に対してささげる賛辞である」「女は永くその最初の人を守っている。ただし、第二の人ができないかぎりは。」といった、現実を皮肉たっぷりにこき下ろした箴言を多く残しました。

閑却^{かんぎやく}する：いいかげんに放っておくことです。

話頭を転換^{わとう てんかん}する：「話頭」とは話題のことです。「話頭を転じる」で話題を変えることを意味します。

1-2場

こうしょうしゅっしん

高商出身：高商は、高等商業学校の略で、商業・商学を学ぶための旧制専門学校（現代の大学に相当）です。信子の夫が卒業したと思われる東京高商は、一橋大学の前身で、官立高商の中でもトップレベルの学校でしたから、彼がビジネスエリートであることがうかがえます。

ちゅうおうていしやば

中央停車場：現在の東京駅です。明治時代には、次々に鉄道が敷かれ、それらを結ぶための中央停車場を建設する構想が持ち上がります。そして、大正3年に開業した際に、「東京駅」と命名されました。「秋」は大正9年発表ですから、当時は開業したての最先端な雰囲気だったことでしょう。

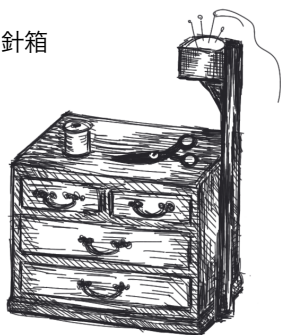
1-3場

はりばこ

針箱：裁縫用具を入れる箱です。

現代でいう裁縫箱です。当時は引き出しがいくつかついた箱状のものが一般的でした。

▼針箱



しやかんせん

書簡箋：便箋のことです。面白いことに、芥川龍之介の作品「三つの窓」「葱」にも桃色の書簡箋が出てきます。芥川龍之介にとって、女性の使う便箋のイメージは、桃色だったのかもしれませんが。

ほね お

骨を折る：人を助けるために、力を尽くすことです。

にわとり

鶏：鶏は戦国時代にヨーロッパから伝わり、江戸時代に卵や肉が食されるようになりました。明治

時代には国内で養鶏が奨励され、名古屋コーチンなどの新しい品種が作られました。

くれがた

暮方：日が沈み、あたりが暗くなる頃、つまり日暮れ時です。

2-1場

きりすときょう にお

基督教の匂いのする女子大学

趣味の人生観：信子通っていたのは、キリスト教系の私立女子

大だったのでしょう。ここでは、そのような思想に対し「少女趣味」という評価、また、流行のトルストイズムや学校で教えられた思想の受け売りを語る信子を、俊吉に近い目線から揶揄していると考えられます。

ゆうらんち

遊覧地：観光地のことです。

きさん

気散じ：気楽なことです。

あみあ

編上げ：編み上げ靴、つまりブーツのことです。大正時代、多くの

サラリーマンは家では和装、職場では洋装をしていました。しかし、夫は休日も洋風の編み上げ靴を履いていることから、当時にしては先進的な服装をしていたようです。

けしょうせつげん

化粧石鹸：洗顔用の質の良い石鹸です。

せいしん

清新：新しくてさわやかなことです。

まいこ

舞子：神戸市垂水区にある地区で、現在は明石海峡大橋の始点になっています。淡路島を望む景色が絶景で、「舞子の浜」として古くから有名でした。明治時代には、明治天皇や有栖川宮がよく訪れ、明治21年に有栖川宮別邸が建てられてからは、政治家や実業家の別荘地になりました。

ちやや

茶屋：観光客や旅人がお茶やお菓子で一休みするためのお店です。

げび

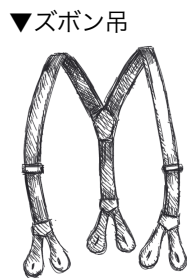
下卑る：下品なことです。

2-2場

えり襟：大正時代の男性のワイシャツは、一般的にスタンドカラー（詰め襟）の本体の上から、着脱式の角襟を付けて着用していました。昭和10年頃、はじめからカフスや襟が付いたワイシャツが定着します。

せんたくや洗濯屋：クリーニング屋の前身です。家々から洗濯物を集めて洗う洗濯屋は、江戸時代から存在していました。当時は洗濯機がなかったため、石鹸と重曹を使って、手洗いしていました。

ズボン吊²⁰：ズボンを履く時に、ズボンがずり落ちないように両肩に掛けるベルトのことで、サスペンダーとも言います。



しょくりようもんだい食糧問題：明治時代以降における人口の急増や、シベリア出兵、輸入米の激減により、大正時代の日本は米不足に悩まされていました。米不足から米価が高騰し、大正7年には庶民が暴動を起こすなど米騒動が起きました。

えりかざり襟飾：洋服の襟周りにつける飾り、つまりネクタイやリボンのことです。

るざ紹刺し：紹刺しは刺繍の技法の一種で、着物や羽織に多く使われました。明治時代には一旦廃れてしまいましたが、大正時代に復活、婚礼用の帯などに施されました。男性物では、煙草入れや財布などにも使われ、おしゃれな男性の持ち物として人気があったようです。

2-3場

あまがいう雨外套：雨天時に着るコート、つまりレインコートのことです。レ

インコートといっても、当時は布でできていました。

おんな女のようなくち：信子の夫は、身なりに気を遣う人物です。また、ネチネチと嫌味を言います。こういった彼の性質を、この時代の通念として、また作者の持つ個人的な女性観から、「女性的だ」「女々しい」と悪く捉えての比喻です。男女二元論的であり、差別的な表現と言えます。

まんじりともせずに：少しも眠らずに、うとうともせず、という意味です。

2-4場

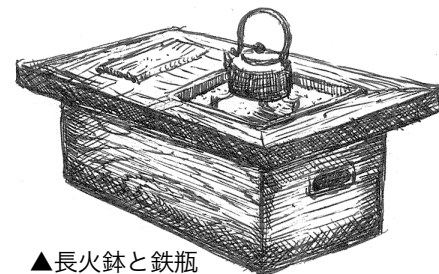
ながひぼち長火鉢：火鉢は、中に灰を入れ、炭火で暖を取る暖房器具です。火鉢にはいろいろな形や材質がありますが、長火鉢は長方形の木製の箱でできていました。

きどく気の毒そうに：現代では、相手

に同情しているようすを表すことが多いですが、ここではきまりが悪かったり、相手にすまなく思ったりするようすです。

どうじんざっし同人雑誌：まだ売れていない作家が、仲間どうしで資金と原稿を持ち寄り、出版した雑誌です。明治時代以降、『文學界』や『青鞥』、『しらかば』など多くの同人雑誌が発行され、大正時代末には1000誌を超える数が発行されました。

はぐる：はいでめくることです。「布団をはぐる」「ページをはぐる」のように使います。



▲長火鉢と鉄瓶

^{かいぎやく}**諧謔**：気の利いた冗談やユーモアのことです。

^{みやもとむさし}**宮本武蔵**：江戸時代の剣豪で、刀を2本使う二天一流兵法の開祖として有名です。2つの武器を巧みに扱うようすを宮本武蔵にたとえています。

^{すてばち}**捨鉢**：思いどおりにいかず、やけになることです。

^{みせ ひろ}**店を広げる**：いろいろな物をそこらじゅうに並べることです。現在は一部地域でしか使われないようです。

2-5場

^{ゆいのう}**結納**：婚約成立の証として、男性側の家から女性側の家へお金を渡したり、反対に女性側の家から男性側の家へ御礼の品を渡したりする、一種の儀式のことです。庶民が結納を行うようになったのは、明治時代のこと、戦後まで広く

行われていました。現代では、結納をせずに済みますカップルも増えており、結納を行う人は1〜3割程度になっているようです。

^{やま て あるこうがい}**山の手**の**或郊外**：東京の麻布、赤坂、四谷、本郷のあたりは「山の手」と呼ばれ、下町に比べ、標高が少し高くなっています。江戸時代までは武家屋敷があり、明治時代以降には官僚や軍人などの住宅が集中しました。

^{ちゅう}**候えども**：「候う」は「ある」の丁寧語で、「あります」「ございます」という意味。つまり、「候えども」は「ありますが」「ございますが」という意味になります。「ございます」「ます」の代わりに「候」を使って書く文を「候文」と言い、手紙などでよく使われました。

^{そうそう}**簇族と**：群がって集まっているようすです。

^{たいぎ}**大儀**：疲れてだるいことを指します。

^{ひばし}**火箸**：火鉢などで燃えている炭を移動したりするのに使う、金属製の箸です。

^{はいもじ}**灰文字**：火箸で灰をなぞると、砂浜を指でなぞったときのように、跡が残ります。このようにして、火鉢に敷いた灰に書いた字だから灰文字です。

^{しわす}**師走**：12月の異名です。

^{しゅうね}**執念く**：「執念深く」「しつこく」という意味です。

3-1場

^{いちげん}**日限**：決められた期間のこと、または期限のことです。この場合は、夫の出張期間のことを指します。

^{そうそう}**匆々**：「忽々」とも書きます。忙

しいことや慌ただしいことです。「来匆々」とは「来てすぐに」という意味です。

^{しんかいち}**新開地**：新しく開けた市街地のことです。当時の東京郊外は、新興住宅地といったところでしょうか。神戸市の「新開地」や伊勢市の「しんがい」、さいたま市の「しびらき」など、地名として残っているところもあります。

^{くるま}**俥**：人が引く車、人力車のことです。明治時代に駕籠に代わる交通手段として普及しました。「俥」は、人力車を表すために作られた漢字です（実際は中国の古い漢字として存在していましたが）。現代では浅草などで観光用として見るができます。（幌付きの人力車は、4-3場「幌俥」の項参照）

せせこましい：ゆとりがなく、窮屈なことです。

のき打ちの門：この言葉は、辞

書でも建築関係の書籍でも見つけられませんでした。芥川による造語ではないかと考えられます。軒のき（屋根）のついた門ではないかと思われます。※ご存知でしたら情報をお寄せください

かなめ **要もちの垣**：「要かき 籾かなめもち」という種類の木で作った生け垣のことで、す。若葉と落葉前の葉は赤く、木全体が赤く染まります。また、春の終わりには、白い小さな花を咲かせます。現代でもよく生け垣などに使われます。

い **が栗頭**：髪を短く刈った頭のことです。トゲトゲした栗の殻に似ていることからそう呼びます。

じょちゆう **女中**：江戸時代、裕福な武家や農家には住み込みの使用人がいました。武家では、裁縫や習い事をし、花嫁修業の意味合いが強いものでした。明治時代になると、中流家庭にも、住み込みで家事や子守をする女性の雇用が広まりまし

た。

うら **裏**：服の裏地のことです。

したん **紫檀**：床柱や家具に用いられる、木目のきれいな樹です。磨くとつやがでて、硬くて丈夫なことから、昔から高級木材とされてきました。

いちめん **一面の琴**：琴は、平安時代から伝わる日本の伝統的な弦楽器です。明治時代には女性のお稽古事として一般家庭にも普及しました。「面」は琴を数える時の単位です。

まきたばこ **巻煙草**：現代で「タバコ」と聞いた時に真っ先に連想する、煙草を紙で巻いたものです。日本では江戸時代から煙管を使った喫煙が一般的でしたが、大正時代には、少ない道具で手軽に喫煙できる紙巻煙草が広く普及しました。



3-3場

ぶどうしゅ **葡萄酒**：ぶどうで作ったお酒、つまりワインのことです。日本では、室町時代にはじめてヨーロッパから伝わり、明治時代に入ってから、国内での生産がはじまりました。

しゃかいしゆぎ **社会主義**：社会主義は、様々な格差を生む資本主義に反対し、生産手段や財産を社会全体で管理することで、万人が平等な社会を作ろうとする考え方です。誰かが勝者になることを良しとしないため、お金持ちや権力者に対して批判的であることが多いです。

くだもの **果物を荒らす**：食べ物などを、あちこちつついて食べることで、大皿に盛り、三人でつついたのでしょうか。

びすい **微酔を帯びる**：「微酔」とは、ほろ酔いのことです。俊吉は、軽く酔っているようです。

だんろんふうはつ **談論風発**：話や議論を活発に行うこと、話し合いが盛り上がることです。

グールモン：フランス人の批評家、詩人、小説家です。男女についての格言を多く残しています。

「ミューズたちは女だから、彼等かれらを自由じゆうに虜とりこにするものは、男だけだ。」：「ミューズ」はギリシャ神話に登場する、芸術を司る女神です。芸術の女神に愛されることができるのは男性だけ、つまり芸に秀でるのは男性だけだ、という意味です。「優れた、または名を成した芸術家、政治家、科学者は男性ばかりだ」という議論は、歴史上、たびたび行われてきました。

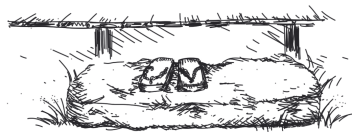
「女でなけりゃ、音楽家になれなくて？ アポロは男じゃありませんか。」：「アポロ」はギリシャ神話に登場する音楽を司る男神です。ミューズに愛されるの

が男性だけならば、アポロに愛されて音楽に秀でるのは女性だけなのか（そうではないでしょう?）、という高度な返しです。

3-4場

沓脱^{くつぬぎ}：玄関と土間の間、縁側と庭の間などにある、履物を着脱する場所です。一般的に、平たい大きな石が使用されます。

▼沓脱と庭下駄



庭下駄^{にわげた}：庭を歩くための、簡単なつくりの下駄です。

足袋^{たび}：日本の伝統的な衣類で、和装の際、足に履きます。主に木綿の布でできており、小鉤^{こはげ}と呼ばれる特有の留め具で固定します。下駄など鼻緒のついた履物を履くために、指先がふたつに分かれた形

をしています。足先に力が入りやすいため、最近では「足袋ソックス」といって、足袋の形をした靴下も売られていますね。

十三夜^{じゅうさんや}：新月から13日目の月のことです。十五夜が満月ですから、かなり円に近い形をしています。そのため、明かりがなくても、庭を歩ける程度には明るさがあります。

蓆^{むしろ}：わらや竹などを編んで作った敷物。敷物に使う「ござ」も、蓆でできています。簡単な小屋の壁代わりに使うこともありました。

横ばい^{よこ}：体長数ミリの昆虫です。横にずれながら歩くようすから、横ばいの名がつきました。明かりに寄る習性があります。黄色っぽい見た目のものは、バナナムシと



4-1場

外套^{がいとう}：西洋のオーバーコート。防寒用のアウターです。



▶外套

中折^{なかおれ}：頭頂部の中央が縦に織り込まれた帽子です。第二次世界大戦前までよく使用され、公務員や会社員に人気でした。

訪問記者^{ほうもんきしや}：辞書や明治・大正時代の言葉を集めた辞典を当たりましたが、見つけれませんでした。が、当時、新聞社の依頼を受けて取材やインタビューをする記者がいたそうです。ここでは、俊吉にインタビューをしに来た記者のことを指すのではないかと推測されます。※ご存知でしたら情報をお寄せください

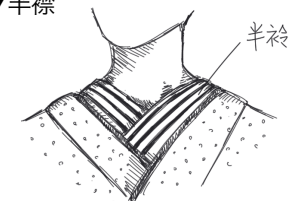
歌劇団^{かげきだん}：日本では宝塚歌劇団が有名ですが、「歌劇」というと一般にオペラのことを指します。照子が観に行ったのは外国の歌劇団ですが、大正時代には浅草でオペラやミュージカルが盛んに上演され、「浅草オペラ」と呼ばれました。

4-2場

懶い^{ものう}：通常、「物憂い」と書きます。動くのも面倒なほど気がふさいでいたり、憂鬱だったりするようすです。

半襟^{はんえり}：汚れを防ぐために、和服の襟の上に重ねる襟です。特に大正時代の女性たちは非常に派手な色柄の着物や帯を身に付けており、

▼半襟



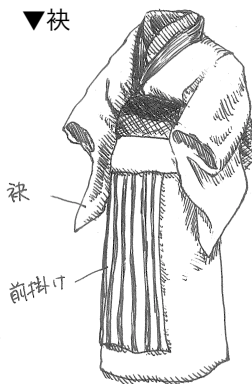
同じく派手な半襟を幅広めに出して見せ、その組み合わせを楽しみました。

^{てつびん}
鉄瓶：お湯をわかすための道具で、ヤカンを一回り小さくしたような形をしています。ヤカンと違い、鉄製なので、重くどっしりとしています。(図は2-4場「長火鉢」の項参照)

^{れんびん}
憐憫：同情することです。

^{べいかもんだい}
米価問題：⇒食糧問題

^{たちと}
袂：和服の袖の、袋のように垂れた、いわゆる「袖の下」の部分です。江戸時代、この部分に隠すようにこっそりと品物や金銭を渡したことから、今でも賄賂のこと



を「袖の下」と言いますね。

4-3場

^{ほろぐるま}
幌俵：簡単な屋根のついた人力車です。当時は、日よけや雨よけのために幌がついているのが一般的でした。



セルロイド：プラスチックの一種で、写真のフィルムや眼鏡のフレーム、おもちゃなどに広く使われました。燃えやすい素材のため、ポリエチレンなどの合成樹脂素材に取って代わられました。

^{ばすえ}
場末：繁華街の中心から離れた場

所のことです。繁華街の端で、少し寂しい印象を受けます。

^{しゅんじゅん}
逡巡：決断したり行動したりすることをためらうことです。

附録

解説

一場

登場人物と、その相関図が出揃います。

芥川には、吉田弥生という初恋の女性がいましたが、彼女に失恋した後、妻の塚本文子に出会います。
ここでは、芥川龍之介が自分自身を俊吉に投影していると仮定して、人物相関図を場面ごとに追ってみます！

見所

冒頭から、長い間、主人公であるはずの信子の心情や主観が全く語られず、人物像や関係性は全て、客観的事実と周囲の憶測で描写されます。妙な現実感を与えつつ、読者が登場人物に感情移入しすぎず適度な距離を置くとも言えます。

朗読を楽しむポイント

会話が出て来ません。語りの腕の見せ所。早口にならないよう、注意しましょう。
照子の手紙は、長い独白です。姉への強い思いを、瑞々しくたっぷりと表現しましょう。

夫

高商を卒業したエリートサラリーマン。

▼弥生は、芥川と破談になってすぐ、陸軍将校の金田一光男と結婚。夫のモデルは光男？

周囲

大学生など若い仲間？

大学卒業後すぐに結婚。大阪へ移住。家計を助けるためもあった。
しかし本当に全ては犠牲的な決断だったのかと言われると…？

▼実際、俊吉と恋愛関係ではないし、好意を伝えたこともない。
▼当時の駆け出しの作家は売れないバンドマンのようなもの。
信子はしっかり勝ち組と結婚。

既に小説を書いただろう、すぐに作家になるだろう、などと噂する。
信子と俊吉の仲を羨み、結婚を予想。夫と結婚するとまた様々な憶測が飛び交う。

▼何かと注目される存在。
▼本当に作家になる素養があったか不明。

信子

女子大学で文学を学ぶ。

▼弥生は、青山女学院英文科卒の聡明な女性だった。

昔から仲が良かったが、文学という共通の話題もできる。

▼弥生には縁談があったが、芥川は求婚。結局、家族の猛反対で破談に。大失恋。

展示会や音楽会に3人で出掛ける。
照子は置いて行かれがち。
置いて行くのは信子！

姉として慕う。憧れ？ 尊敬？
信子は自分に俊吉を譲って結婚したと推測し、感謝。罪悪感も。

▼信子が俊吉を好きかどうかは不明確。

結婚後、照子からの手紙を日々の心の支えに。
照子が俊吉を好きなことを察していた。

母親

後家を立て通してたきた。
実際には登場しない。

俊吉

大学の文学科。作家を目指す。
流行の思想には興味なく、独自路線。

▼もしかして芥川自身？ 理想の自分？

どう思っているか分からない。
具体的な記載なし。

照子

まだ女学校を卒業していない。
鶏を大事にしている。

好意。
憧れ？

一〜二場

信子と夫の、大阪での夫婦生活を描いています。

結婚(春)、新婚生活(夏)、関係性が変化(秋)、俊吉と照子が結婚(冬)と、全ての季節が巡ります。

キーワード

【シャツの襟】毎日着る白い糊の利いたシャツと飾り襟は、夫のこだわりや不変性を象徴しているようです。

【松】家から見える松の木は、1年中黒々と茂っており、大阪での生活を半永久的に思わせます。

【雪・魚の生臭さ】俊吉と照子の結婚に対する、信子の複雑な心情を巧みに表現しています。

朗読を楽しむポイント

夫は、機嫌が良い時も悪い時も、上品さを保ちましょう。決して悪気のある人物ではないと思われます。内心想っていることをはっきり言わず、何かを期待して意味深長に言葉を紡ぐ信子と、それに気付かずに凡庸に会話を進める夫との、掛け違いを意識してみてください。

夫

“女性的”で無口。
夕刊や雑誌を読む。経済に最も関心を持つ。
シャツの襟やヒゲなど、身だしなみに気を遣う。

▼明治時代は筋肉的で雄々しい男性像。大正時代は洗練された新しい男性像？ 量産型夫の代表？

▼現代の不倫ドラマに登場する夫の元祖のよう。

▼芥川は、刺激のない男を選んだ弥生が退屈し、後悔したと信じたい？

幸せな新婚生活。よく出掛けていた。
やがて夫は信子の家事について嫌味を言う。酔って帰るように。
仲が悪いわけではない。
俊吉のことを思い出すようになってから、夫に従順に。媚びる。
針仕事をする。化粧をする。

▼夫への反省？ それとも内心でくすぶり始める浮気心？

他の関西人と違って身綺麗、大人しい、清潔。

▼夫を理想化して結婚を肯定しようとした？

▼本当は物足りない？

信子の機微に鈍感。
信子の文化的な話にはコメントしない。
家事をしてくれないと困る。

周囲

結婚後、信子は存在自体を忘れられる。

▼所詮、世間とはそんなもの？

信子

夫の留守に小説を書くが、筆は進まない。
夫に思想や文化を語る。
(キリスト教の匂いのする女子大学趣味の人生観)

▼信子の芸術は“受け売り”
“かぶれ”とバカにしたニュアンス？

▼芥川が会った官能的な人妻がモデルになったとも言われる。雑誌掲載バージョンにはそちらの方が色濃く出ており、現在の『秋』は弥生の影響が強いと思われる。

文通も絶える。

▼直接やりとりしていないから余計に感傷的に？

義理の姉弟に

俊吉

雑誌に投稿を始める。

▼芥川は、弥生に失恋後、『鼻』を執筆。夏目漱石に称賛され、作家を目指す。

雑誌に俊吉の投稿したものを見るように。
そこには以前と違う作風、(信子が結婚したことによる)寂しさや、やけっぱちな節があるように読み取る。

▼信子がそう思っているだけ？

▼芥川は、弥生と破談になってすぐ、体調を崩す。「エゴイズムと無縁の愛情はありうるのか」というテーマにハマる。

結婚することに。理由や経緯は記載なし。

▼芥川は、弥生に失恋した後、文子に会い、好意を持ち、数年後に結婚する。

手紙で近況を知らせる。

夫との関係に悩むと、こんな時に理解してくれるのは照子だけだ、と懐かしむ。心の支え。

照子の結婚を知らせて来る。

照子

母親

三～四場

信子が俊吉・照子を訪問、関係が複雑に。

大学卒業・結婚から約1年半ぶりの“秋”に、3人が再会します。

キーワード

【鶏】照子が愛する鶏。卵を人間に取られる、略奪の象徴として描かれている？

【横這い（ヨコバイ）】家に入り込んだ害虫を象徴している？

朗読を楽しむポイント

俊吉は、作為的ではなく、基本的には快活に読んだ方が、むしろミステリアスに感じるのではないのでしょうか。ただし、夜の庭でのシーンは、しっとりと雰囲気を出しましょう。

信子と照子の会話は、沈黙の間の使い方もポイントになります。女中に怪しまれない声のトーンも工夫どころ。

ラストシーン、信子の「俊さん」と「秋」はヒロイン感たっぷりに、ドラマチックに読むと、締まります。

夫

東京で仕事。忙しい。

会社の用事で忙しく、
2人では出掛けられず。
実家には2人で訪問。

母親

▼この話の軸は、信子を中心に、
自意識、エゴイズム、自尊心、支配
欲、依存心などと言える？

劇団ののを読む 芥川龍之介『秋』- 解説 (3)

信子

夫の出張について東京へ。
俊吉と照子の新居を訪問。
若返った気持になり、執筆
への熱が甦る。

女中

信子の家庭はエリートだが女中がいない。作家は
安定しない職業だが、女中がいる。

▼信子の“籠の鳥”感、照子の充実感の対比を強調？
▼セリフはないが、俊吉と信子が2人きりになった
ことを「女中さえ不在」と強調する効果、信子と
照子の一触即発状態に禁断の緊張感を増す効果？

2人きりになり動揺。俊吉
に何かを期待。

▼自分から何か言うわけ
ではない。

俊吉の留守に2人で話し、気まずい空気に。仲直りしたが、
信子は寂しい諦めと共に、永久に他人になったように感じる。

2人の間に特別な結びつきがあるのではないかと疑い、不安に。
姉は姉で夫と幸せな結婚生活を送っていると信じていた。

▼俊吉と結婚しても、超えられない壁がある？
▼改めて、信子への罪悪感や劣等感を自覚する？

偶然、家で2人きりに。話は尽きないが、
暮らし向きには触れない。
夜、2人で月を見て、庭歩きする。

信子に対し、特に緊張や裏の
意図など無い様子。

▼信子と照子の水面下の葛藤に、
気付いているのかいないのか？
▼信子が小説を書こうかしらと
言うが、返事しない。俊吉の
文学は仕事で、所詮信子の文学
は“にわか”と言いたい？ 弥生
への当て付け？

昨冬に結婚して
半年以上～1年
未滿。
山の手の郊外に
新居を構える。

俊吉

作家として仕事を始めている
らしい。家で仕事をする。
葡萄酒を飲み、語る。楽し
そう。

▼思わせぶり？ 人たらし？

結局、どう思っているか
分からない。具体的な記載
なし。

▼「芥川は、自分の伴侶は
文学に理解のある人でなく
て良いと言っていた」と
言われている。文子は
芥川の数ある女性問題に
不満を言わず、家事育児
に専念し仕事を支えた。

照子

琴を弾く、近所付き合いが
ある。観劇をするなど、充実
した暮らしをしている。
相変わらず鶏を大事にして
いる。

俊吉の影響か、文化的な知識
を付けて来ており、2人の話
について来て、気の利いた
切り返しをしたりするまでに。

▼俊吉と信子の関係へのコン
プレックスの1つは、芸術へ
の理解度だった？

泣いている照子に対して、「俊吉さんがあなた
を愛していれば良い」と言い聞かせながら、
「残酷な喜び」を感じる。

▼俊吉と照子の家庭も、照子自身も、自分
抜きで確立されて見えた。永久に大阪の家で
夫と生きて行く立場だと悟った信子は、俊吉
への疑念を植え付け、照子を呪縛、照子の
感情をもう1度支配下に置こうとした？

